

地方創生 スペシャル対談

荒れ果てた山河 適地適作で守る

——奥野氏

少子高齢化に過疎化と、地方を取り巻く環境は楽観できるものではありません。どうすれば「地方創生」を実現できるのでしょうか。この難題の答えを、地方とともに歩んできた二人のリーダーが探りました。全国農業協同組合中央会（JA全中）の奥野長衛会長と、スズキの鈴木修会長。全く異なる道を歩んできた二人ですが、想いは自然と重なり合いました。

農業が好きな若者増大 時代の移り変わり象徴

——まずはお二人の「ふるさと」の思い出についてお聞かせください。
鈴木 私は岐阜県の飛騨の山奥で育ちました。戦前の貧しい時代。粟しんどい秋に開かれる農産品の品評会でした。農家の自信作を、一目見ようと街中の人が集まる。本当に美味しそうでね。私が今も「食いしん坊」なのは、そんな時代に育ったからでしょう。
奥野 私は三重県の伊勢出身で



す。鈴木会長のふるさと、飛騨と違うのは山がないことです。畑作中心で、農閑期になると遠く山まで出かけて下刈りをして薪を確保したものです。海が近く、漁を終えて帰ってくる船の「ぼんぼん」という音が朝の知らせでした。
鈴木 そういえば、私が生まれて初めて海を見たのは小学校の修学旅行で伊勢に行った時でした。
——地方を取り巻く環境は厳しい。ふるさとを守るには何が必要ですか。
鈴木 明治時代からの縦割りの構造

を見直すことです。各地の商工団体を農協が別々に行動するのはなく、連携する。私の地元の浜松商工会議所ではJAとあ浜松の会長が副会頭に就任されると、農業と商工業の交流が一気に進んだ。農から学ぶことが実に多いのです。
奥野 若い方の就農が増えています。資本主義が成熟した今、自然に帰る現象が起きているのでしょう。

ふるさとの未来は「農」にあり

農業が好き、ということが大切。JAグループでは、基礎教育から耕作地の紹介まで支援しています。私の座右の銘は「世界人類の大本は農にあり」。商店街がシャッター通りになってしまった地域に農業が好きなき若者が移り住むのが理想です。
鈴木 スズキも事業として農業に参入していますが、希望する社員が増えています。昔は手いだけの農作

業が、技術の進歩で効率化された。それなら工場で働くより、四季を感じながら大地とともに生きていきたい、と思うのは自然です。時代が変わったのです。
5年ほど前から注目しているのは、全国各地で開かれている軽トラ市というイベントです。週末に農家の皆さんが自慢の作物を軽トラの荷台に載せて、寂れた商店街に集まる。商店街のお店も軽トラ市に参加する。農商工が「美味しさ」で二つになると、町中の人々が笑顔で集まってくるのです。幼少の頃の飛騨の品評会と同じ光景です。



軽トラは農家の必需品
道幅4mの農道を考慮

——農の活力を、商工の知恵でいかに引き出すかが重要ですね。
奥野 多様な知恵が必要です。例えば軽トラックは農の現場を知り尽

くした工（たくみ）の知恵です。道幅4mの農道でも邪魔にならないから、農家にとっては「下駄」のような必需品。道の狭い中山間地域にも適した「国民車」と思っています。
もう一つ私が強調したいのは、山や川の荒廃という問題です。国破れて山河あり、という言葉があります。今の日本は、国はあるけれど山河が管理されず、荒れている。国民が同じ危機感を持たなければ手遅れになります。農業のグローバル化も重要ですが、「適地適作」で地域を守ることも重要。車の両輪なのです。
鈴木 スズキがインドなどで開えるのも、軽を地方の皆さんが支持してくれたからです。まさに車の両輪。農商工の総合力を発揮して日本を立て直すために、最大限努力します。

農商工連携

軽トラ市がモデル

——鈴木氏



スズキ 会長
鈴木修氏

全国農業協同組合中央会(JA全中)
会長
奥野長衛氏